

第3章 ヘリコプター・ベースのかたち

1 安全な航空医療搬送をめざして

フローニンゲン大学病院のヘリコプター基地を訪ねた際に気づいたことのうち、大きなものの一つが、救急ヘリシステムの成熟化する過程において、如何に安全性を確保できるかという課題である。日本では、ドクターヘリが全国11カ所に広がってきたが、万が一にも不幸な事故が起これば、普及への流れに水をさすことになりかねない。その意味で、安全な医療搬送を確保するための一例を、フローニンゲンのヘリコプター基地で調査してきたことから、考察してみたい。

写真1はその一端で、同基地内のスローガンを示す。これには“Fit to Fly?” (あなたは飛行に適した状態ですか) という題名がついており、ヘリコプターが待機している写真の下



写真1 安全スローガン

に、「疲労は、あなたを死に追いやります」とのキャプションがある。そして IMSAFE (私は安全) の頭文字ごとに、I: illness (病気)、M: medication (薬剤投与)、S: stress (ストレス)、A: alcohols and drugs (アルコールと違法薬物服用)、Fatigue (疲労)、Experience (経験不足) の危険因子が掲げてあった。航空医療に関わる全てのメンバーが同じ安全意識を共有するに役立つ成句とあってよいだろう。

2m

2 ヘリコプター基地の構造

右図はヘリコプター基地のレイアウトを示す。きわめて余裕のある構造になっている。仮眠室や休憩用のスタッフ用ラウンジがあり、スタッフが十分に休養をとって、リラックスした環境で仕事ができるようになっている。この上に次頁の図2のように、格納庫、移動式ヘリパッド、屋上ヘリポートのある階上に階段で結ばれている。

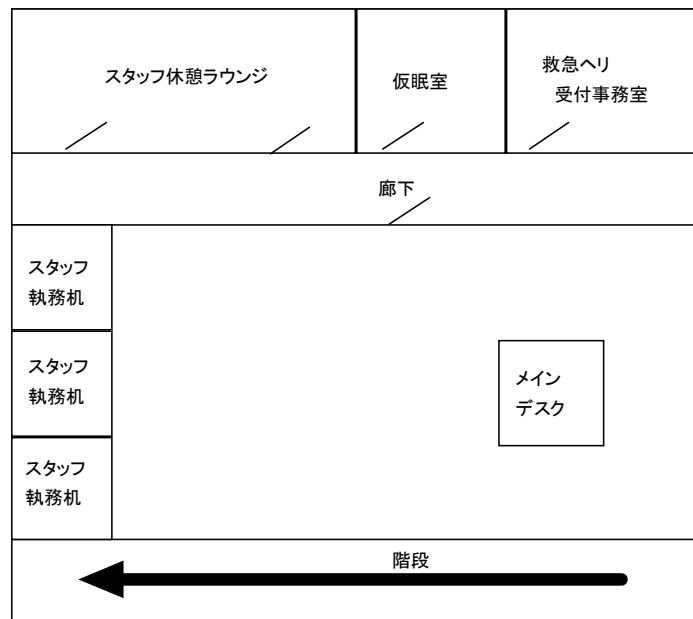


図1 階下部分の見取り図

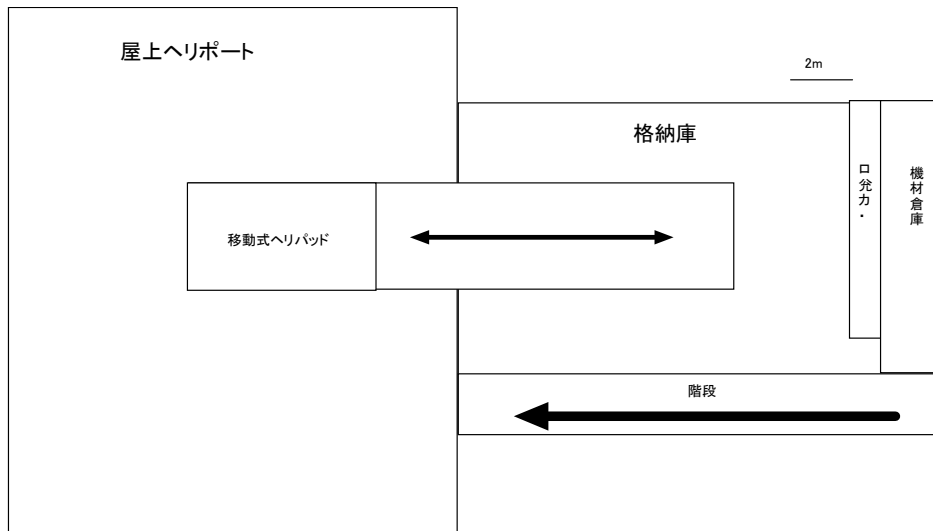


図2 階上部分の見取り図

下の写真2、3はメインデスクの状況、写真4はメインデスク奥の壁を示す。



写真2 メインデスク状況 (1)



写真3 メインデスク状況 (2) 出動
がかかった瞬間



写真4 メインデスク奥の壁面



写真5 屋上ヘリポートから出動

屋上ヘリポートには写真7のような消火設備がある。



写真6 機材庫の棚



写真7 屋上ヘリポートの消火設備

3 その他のリスクマネジメント状況

基地の構造の他に、リスクマネジメントの観点から、何点か追加しておきたい。ひとつはヘルメットである。日本ではまだ、救急ヘリコプターもしくはドクターヘリのスタッフ全てにヘルメットを装着するまでに至っていないが、欧米では常識化している。写真7は、その一つドクター用のヘルメットを示す。



写真8：医師用ヘルメット、後ろに見えるのは個人用ロッカー

また、機材の装備品のなかで、オランダで搭載されていて日本のドクターヘリには必ずしも搭載されていないのが、ガラス破碎器具である。写真9は、機内に装備されたガラス破碎器具を示す。これは、ヘリコプター自体が事故にあったとき、脱出用に使えるのはもちろんのこと、自動車事故の際、車内に閉じこめられた負傷者の救出にも役立つ。

写真9は、機内に装備されたガラス破碎器具を示す。これは、ヘリコプター

自体が事故にあったとき、脱出用に使えるのはもちろんのこと、自動車事故の際、車内に閉じこめられた負傷者の救出にも役立つ。

4 まとめ

以上、オランダの救急ヘリコプター基地における安全管理の状況を調査して報告した。本邦では、限られた予算の中でドクターヘリ事業が行われているが、オランダのように、余裕を持ったスペースと体制で、救急ヘリコプター事業が行われるべきであると思われた。関係者の並はずれた努力と無理の積み重ねに依存しているうちは、なかなか。安全文化が育ってこない。余裕を持った救急ヘリ事業のあり方を本気で考える時期に来ている。(奥村徹)



写真9：機内に装備されたガラス破碎器具